

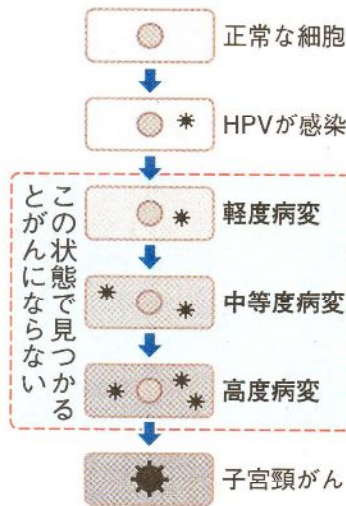
女性のがん 死因2位 子宮頸がんの原因

HPV検査で意見対立

女性のがんの死因では、世界で二番目に多い子宮頸がん。原因は一部の型のヒトパピローマウイルス（HPV）への感染で、これを解明した研究者には昨年、ノーベル賞が贈られた。ウイルスの検査は感染の把握に有効だが、自治体が行う住民検診への導入の是非をめくり、「勧めない」とする厚生労働省研究班と、日本産婦人科医学会との意見が分かれている。

子宮頸がんは毎年新たに 住民検診は二十歳以上を対
診断されるのは八千人以上 象に二年に一度となってい
で、約二千五百人が亡くなる。 現在の検査方法は、子宮
すれば予防が可能のため、 の入り口（頸部）を綿棒な

HPV感染と子宮頸がん発症までの流れ



とでこすり、細胞を採取し
て顕微鏡で調べる「細胞
診」。がんになる前に軽度
から中等度、高度へと進行
する病変のうち、中等度で
の発見を目指している。こ
の段階から、がんに発展す
るのは5%程度とされる。
問題は20～30%程度の見

発見時の病変の度合いとその後

	消える	そのまま変わらず	がんに発展
軽度病変	60%	30%	1%
中等度病変	40%	40%	5%
高度病変	33%	56%以上	12%以上

国際婦人科病理学会誌1993年

厚生労働省研究班

「過剰診断」の恐れ

産婦人科医学会

住民検診に採用を

逃しがあることだ。医師の
技量によってはさらに多い
場合もあり、医会常務理事
の鈴木光明自治医科大学教授
は「目で異常を見つけるこ
とには限界がある」と指摘
する。

一方、HPV検査はワイ
ルスの遺伝子を手掛かりに
するため見逃しは少ない。
自治医大などのチームの調
べでは、中等度の病変は95

集団での死亡率を下げられ
るかどうかが、論文などで十
分な裏付けがない上、「過
剰診断」の恐れがあるとい
うのが理由だ。

「ウイルス感染、イコー
ル病気ではない」と、研究班
の浜島幸子と国立がんセン
ター検診評価研究室長は説
明する。特に二十代では、
後にウイルスが消えてしま
う一過性の感染が多いた
め、すべてを病気と判定す
るのは問題で、ほかの世代
でも、がんまでに発展する
を懸念する。

HPV検査が最も力を発
揮するのは、細胞診で良性
か悪性かの区別がしにくい
「灰色」の病変が見つかつ
た時だ。こうしたケースで、
中等度よりも重い病変であ
ると判明するのは約10%と
されるが、すべてに精密検
査を行うのは効率が悪い。
この時点でHPV検査を
実施し、陽性なら精密検査
に進む方法も有効だとい
うのが医会の立場。住民検
診への導入が直ちにできな
くても、まずはこうした使い
方をするべきだとしてい
る。研究班もこの使い方の
有効性は否定していない。

割合は多くないという。

これに対し鈴木教授は
「HPV検査により、子宮
頸がんによる死を避けられ
るだけでなく、子宮を守り、
妊娠できる体の維持もでき
る」。評価基準を死亡率減
少に貢献したかだけに置く
のは、誤りだと反発する。

ただ、妊娠の可能性が問
題になるのは住民検診の対
象となる女性の一部の世